

# わたしたちの町にも空襲がありました

昭和16年12月8日に始まった太平洋戦争。日本は、緒戦においては随所に予想以上の戦果を挙げました。しかし、開戦翌年のミッドウェー海戦を境に、徐々に戦況は不利に。やがて、本土に対する米軍機による空襲が本格化しました。昭和20年に入ると全国の各都市に対してほとんど連日連夜行われるようになりました。前橋市が米軍のB29の空襲を受けて、当時の市街の約80%を焦土と化す被害を受けたのは、太平洋戦争終結のわずか10日前、昭和20年8月5日夜でした。

問い合わせは 市政発信課 ☎027-898-6642

## 8月5日の大空襲

この日は朝から晴天で蒸し暑い日でした。7月以降、本土への空襲が頻繁になり、新聞もラジオも「本土決戦近し」と告げていました。前々日から米軍機の宣伝ビラ（空襲を予告するビラ）の投下があり、この日も緊張のうちに朝を迎えました。午前8時45分、早くも警戒警報が発令、9時4分解除、11時15分また警戒警報が発令され、11時27分空襲警報発令、午後0時45分空襲警報解除、0時52分警戒警報も解除されました。その後は日が暮れるまで一機も来ず、嵐の前の静けさというような無風状態で真夏の太陽が照りつけていました。

そして午後9時、突如警戒警報が鳴り、ラジオは米軍機の北上を告げ、

次いでB29の編隊が九十九里浜から本土上空に侵入し、西へ向かっていると伝えました。9時45分に空襲警報が鳴った時は、すでにB29の編隊が、ものすごい爆音をどろかせて本市の上空に迫っていました。

午後10時30分、先行機がまず照明弾を4カ所に投下して、市街を真昼のように照らし、それに続く編隊機が岩神町上空で最初の焼夷弾しょういだんを投下しました。それが、県立前橋工業学校（現在の三中付近）の庭と、共愛女学校の校舎に落ちて火を噴きました。同じころ、下川淵村大字横手にも焼夷弾が投下され、これらを合図とするかのように市内中心部に大量の焼夷弾や爆弾が次々に投下され、

辺り一面が瞬く間に火の海と化しました。

すさまじい米軍機の爆音や焼夷弾の落下する音、爆弾の爆発音、家屋の焼失または崩壊する音、警防団と市民の消火の掛け声、さらには避難者の呼び声や悲鳴などが入り混じって市内中心部は非常に悲惨で見るに耐えない状況でした。

空襲は午後11時45分まで1時間15分にわたり行われ、周辺の桂萱、芳賀、

南橋、東、元総社、下川淵などの各村にも焼夷弾や爆弾が投下され相当の被害を受けました。

この夜の空襲により、本市は当時の市街の約8割が焦土と化し、全市20,871戸のうち、全焼11,460戸、半焼58戸に上りました。また、死者535人、負傷者は少なくとも600人以上に達しました。

（出典「戦災と復興」昭和39年発行）



本町二丁目、千代田町四・五丁目付近  
（故 田村秀市氏 昭和20年8月6日早朝撮影）

## 戦争の悲惨さ、風化させない

### 原田恒弘さん 住吉町二丁目

住吉町二丁目の愛宕神社北側にある「あたご歴史資料館」。ここには戦前から戦後にかけての写真や資料が保管されています。来館者へ対応するのは町内のボランティア約40人。原田さんはその中でも中心的な存在です。

昭和20年8月5日、当時7歳だった原田さんは、逃げ込んだ防空壕くわうごうが猛火に包まれて多くの人が苦しみながら死んでいく様子を今でも鮮明に覚えていそうです。語り部としての活動を始めたのは16年前。「空襲の記憶は自分の心に残っておけばいいと思っていましたが、悲しい出来事を2度と繰り返さないでほしい」と思い、市内の小学校や各種団体に出向いて自身の体験を語り伝えていきます。



毎年8月5日には、前橋空襲慰霊祭が行われています  
（住吉町二丁目 前橋空襲記念碑前）

## 命の大切さを 次の世代に

子どものころから平和の尊さ、命の大切さを学ぶことは大事です。こども図書館では戦争と平和を考えるコーナーを設置。来館者からは、「戦争はいけない」「今の平和がいつまでも続いてほしい」などの声が聞かれました。

